時評

「私性」とは何か

本田一弘

「私性」をめぐる話題について二つ挙げてみたい。

まず一つ目は、第三十二回現代短歌評論賞受賞作、寺井龍哉氏の「うたと震災と私」である。第二芸術論まで遡って短歌の「私性」を歴史的に整理した上で、大口玲子・俵万智・佐藤通雅・米川千嘉子・栗木京子・吉川宏志・岡井隆といった七人の歌人の震災詠をきちんと読み解いて分析し、読者論もふまえつつ「私性」に纏わる問題を炙りだしている。短歌の「私性」は、第二芸術論以来、前衛短歌運動も含めて否定的に捉えられることが多かったが、寺井の論によれば、引用した震災詠においては作者と作中主体とが強固に結合し、そうした「私性」の表出は、「活発な解釈に耐える強度の保証となる。」と述べ、短歌の「私性」の在り方が肯定的に捉え直された点で画期的な論である。最後に書かれた「歌人に求められるのは、非難を恐れることなく絶えず作品を更新し、新たな表現を提示することだ。そこで私性は束縛となるよりもむしろ公共性をひらく磁針となるはずである。」という言葉に私は大いなる刺激を受けた。一つ注文をいえば、寺井氏は本郷短歌会等に所属し歌も作る東京在住の二一歳の若い歌人のようなので、ぜひとも「当事者」として震災をどう歌うのか、実作でこたえていただきたいと願う。論と作は別でいいという向きもあるだろう（小説の世界ではほとんどがそうだろう）が、作者と作中主体とが密着している短歌の世界ではそうも言っていられない。寺井氏の言う、「絶えず作品を更新し、新たな表現を提示」し、「公共性をひらく磁針となる」べき歌を私は読んでみたいし、私自身もそのような歌を作りたいと思う。

二つ目は、渡辺松男の最新歌集『きなげつの魚』である。

・タイルの目朝のひかりにうきあがりタイルひとつにわれはをさまる

・吾（あ）のなかの何人の吾かなんにんの吾のなかの吾か秋うろこぐも

・われはわれ以外にあらずとめちやくちやなことおもへる日臼は石臼

・生まれつつあるわれ死につつあるわれと蝶ものくるふ野にすれちがふ

渡辺は初期から一貫して「われ」について考え続けている歌人だ。渡辺の歌に出てくる「われ」には独特の不思議な存在感というか浮遊感を覚える。生と死が混然となった中に「われ」がいて、タイルになったり、鱗雲になったりと、第二芸術論や前衛短歌運動が否定した確固たる「われ」というものは存在せず、つねに変幻自在の不安定な複数の「われ」なのである。

「公共性をひらく磁針となる」ような確固たる現実の一人の何かが「私性」なのか、それとも渡辺松男の歌に繰り返しでてくる変幻自在の「われ」のように柔軟な捕らえ所のない複数の何かが「私性」なのか。今ここですぐに結論づけられるような問題ではないと思うので、自らの歌を作りながら、近現代の短歌に限らず古典和歌にも視野を広げつつ、短歌の「私性」とは何かについて考えていきたい。